

文化と自然の「環境コミュニケーション」 ——〈今ここ〉〈彼岸〉の詩的構造としてのシカゴ環境史——

“Environmental Communication” as the Culture-Nature Nexus:
Chicago’s Socio-Environmental History as the Poetic Structure of
“Here and Now” and “There and Then”

浅井優一
Yuichi ASAI

Abstract: From the perspective of “environmental communication” as a way of connecting two dichotomized areas, communication study and environmental study, this paper analyzes the link between three elements: (1) ordinary human interaction, (2) environmental history, and (3) history of the development of the environmental movement and thought in the United States. In so doing, it uses an analytical framework derived from linguistic anthropology, which theorizes human interaction as the dialectical process between “here and now” and “there and then.” First, this paper examines how the participants in ordinary conversation that took place in Chicago in 1974 effectively used a variety of deixis to evoke the conceptualized environmental knowledge as the serially structured value, [the East] > [Chicago] > [the rest of the Midwest], to creatively form their relational identities in the communicative event. Second, it reveals that such conceptualized environmental knowledge coincides with the geographical structure that was shaped in the course of Chicago’s environmental history as it rapidly developed as the gateway city between the East and the (Mid)west through the railroad and the water transportation funded by the investors in the East during the 19th century. Third, it investigates how the American environmental movement and thought established its philosophical basis along with the same environmental context. As Chicago grew up absorbing the East’s capital as the hub between the East (here and now) and the Midwest (there and then), the transcendentalism, which had been formed in the East by Thoreau and Emerson, became localized and developed in the Midwest by Muir and Leopold in

the late 19th and the early 20th century. Such localized transcendentalism in the Midwest emerged as the ideas, “nature conservation” and “the land ethic,” which ended up becoming national parks as “the transcendent” in the West to form its identity. The findings in this paper demonstrate how ordinary human conversation and environmental movement and thought are anchored in the same environmental history in the form of the contextualized environment as knowledge, the East — Chicago — the rest of the Midwest, profoundly linked to forming identities. They also suggest that human sociocultural life is a complex that is constituted out of dialectical interaction with the environmental context.

1. 序論

(1) 背景

環境破壊に対する問題意識が世界的にアノミーを形成しつつある今日、「文化」(人間)と「自然」(環境)との関係性の再検証を試みる学術的視座が、さまざまな学問領域の支配的言説を成しつつある。異文化コミュニケーション学も、その例外ではない。「他者」として自然を人間と対峙させ、その両者の交点、すなわち〈文化と自然〉の相互行為のありようを「コミュニケーション」概念を基盤に考察することによって、人間社会の「持続可能性」を模索する、近年顕著にみられる研究営為は、そうした言説の存在を指標する記号として読みとれよう (cf. 阿部, 2002; 野田, 2003; 結城, 2004)。

(2) 「コミュニケーション研究」、「環境研究」の現在

しかしながら、今日主流となっている「コミュニケーション研究」(たとえば、語用論、談話分析、通訳翻訳研究、(狭義の)異文化コミュニケーション論、など)の実態は、これら「コミュニケーション」に焦点を据える研究の多くが、言語を介したミクロな「人間」の相互行為を理論化することに収束しがち(人間中心主義的)であることを示しており、そこでは、日々無数に生起する人間社会におけるコミュニケーション(すなわち、「文化」過程)において、「環境」(自然)がどのように介在しているのか、あるいは、人間のコミュニケーションを通して「環境」が、いかにしてつくられていくのか、といった問題系がその理論的射程に含まれることは、きわめて稀である。

他方、「環境」に焦点をあてた今日の研究営為(たとえば、生態学、生物学、動物行動学、環境学、環境運動、環境〈エコロジー〉思想、風土論、など)は、「モノなる自然」(野田, 2003, p. 30)、つまり生物・生態学的見地における「環境」、「環境問題」を重視し、その延長線上において「人間」をとらえる志向性が強く、したがって、人間の社会的コミュニケーションの次元(相

互行為を通して構築される文化、歴史といった象徴的次元)をも、(たとえば「身体」、「五感」といったメルロ・ポンティ的なメタファーなどを突破口にして)生物学的必然性に還元する、いわゆる環境決定論に陥りがちである。当然、そうした「モノ(実体)」のリアルに固執する存在論的思考の領野からは、言語分析を基軸に人間の相互行為を理論化する現在の語用論研究、談話分析などの研究成果が十全に顧みられることは皆無に等しく、結果として、環境研究の「ゲットー化」をもたらす「自然フェティシズム」に陥る傾向を内包している¹⁾。

(3) 問題の所在・研究目的—文化と自然の2項対立—

このような、いわば「環境なきコミュニケーション論」と「コミュニケーションなき環境論」として2極化(ジャンル化)した今日の研究営為(あるいは学問体系自体)は、結果的に〈文化と自然〉の2項対立としての近代知を反映しているのではないだろうか。

〈文化と自然〉を2項対立的にとらえるまなざしは、人間(文化)が自然を、自己が他者を、そして近代が前近代を飼い慣らすことにおいて拡大を許される「近代」の構構性を提供していたといえるが(cf. Hacking, 1990)、そうした2項対立的思考は、近代の合理主義的社会に背を向け、「自然(原初・野生・前近代)」としてのアルカディア(物語)への回帰を夢想する、反・歴史へと向かうロマンティシズムの思潮を同時に内包する結果、いみじくも初期フランクフルト学派が喝破したがごとく、さまざまな「問題系」が複雑に纏れ合う社会歴史的コミュニケーションの次元を捨象し、自然と人間の二分法へと人間の思考を還元することにより、「野蛮(=エコ・ファシズム)」を反復する危険性と表裏一体であることは、周知のとおりである。そして、皮肉なことに、「環境破壊」自体が、こうした二分法的思考においてこそ生ずる近代的産物であることもまた、あまねく知られているとおりである。

このような現状を鑑み、本稿では、以下、〈文化と自然〉の2項対立的構図を乗り越えうる枠組みとして、コミュニケーション研究と環境研究の接合を遂行する「環境コミュニケーション」の視座の提示を試みる。そうした両者の接合を通して、われわれが生きる現実世界を、〈文化と自然〉の不即不離な絡み合い(連鎖)が織りなす複合体として考察する視座を可能にすることによって、環境問題をはじめとする諸問題が複雑に交差し合う現実社会に対し、どのようにすれば効果的な介入がなされうるのかについて、より建設的な洞察が得られるのではないかと考える。

(4) 理論的枠組み・構成

1) 理論的枠組み

本稿では、上述した両者、つまり「環境なきコミュニケーション論」と「コミュニケーションなき環境論」を接合する理論的枠組みとして、『異文化コミュニケーション論集』第5号に掲載された、言語人類学者シルヴァスティンによる日常会話の分析に用いられている相互行為理論に依拠して考察を進める。

シルヴァスティン(2007)は、談話において構築される「言及指示のテキスト(言われたこと)」は、形態素や語、句や節などといった言語構造(文法)的ユニット以外に、談話特有の韻律構造、すなわち詩的(反復)構造を伴うことによって生成されるとし、そうした詩的構造を形成する主要な要素として、「ダイクシス²⁾」のペア(たとえば、英語の here / there, now / then, this / that)を挙げている。発話参加者は、相互行為において、「これ」、「それ」、「あれ」などの指示代名詞に代表されるダイクシスを媒介し、ある事象について言及(指示)する(つまり、「なにかについて、なにかを述べる」)ことによって、発話が行われている〈今ここ (here and now)〉

と、言及指示された事象、つまり「今ここ」をとり巻いている〈彼岸 (there and then)〉(コンテキスト) を結びつける。別言すれば、相互行為という出来事が起こっているマイクロな場所を基点に、それをとり巻くマクロなコンテキストを前提的にさし示すことでつくられる〈今ここ〉〈彼岸〉の詩的構造によって、相互行為が「テキスト」として生成されることを解き明かしている (Silverstein, 2007, pp. 35-38)。すなわち、相互行為のテキスト、つまりコミュニケーションという「出来事」(あるいは「経験」) は、ダイクシスを要石とした、「今ここ」(テキスト) と「彼岸」(コンテキスト) との弁証法的絡み合いによって生成されることを明確にしていると言い換えることができよう。

2) 本稿の構成

以上、ダイクシスを媒介とした〈今ここ〉と〈彼岸〉の詩的構造として相互行為を理論化する言語人類学の分析枠組みを考察の支柱として設定し、本稿では、以下の手順によって「コミュニケーション研究」と「環境研究」の接合を試みる。

【第2章】：『異文化コミュニケーション論集』第5号に掲載された、言語人類学者シルヴァスティンによる、1974年にシカゴ大学大学院に通う2人の学生が行った「日常会話」の談話分析事例をとりあげる (Silverstein, 2007)。この学生2人の会話において、シカゴをとり巻く環境が、両発話参加者の間で喚起 (前提) 可能な社会文化的価値体系の知識 ([the East]—[Chicago]—[the rest of the Midwest]) としてコンテキスト化されていること、そのようにコンテキストとして共有された知識である「環境」(「彼岸」) が、発話参加者によって使用されるダイクシスを媒介として、会話が行われている「今ここ」へと結びつけられることで、「環境」が発話者のアイデンティティ、力関係構築の基盤として機能していることを確認する。

【第3章】：環境歴史学者クロノンによる、シカゴという「都市空間」の形成過程に関する環境史的考察 (Cronon, 1991) を、第2章で論じたシルヴァスティンの談話分析事例へと接続する。クロノンは、アメリカ中西部最大の都市シカゴが、19世紀中葉以降、ニューヨーク市を中心とする東海岸 (the East) と中西部 (the Midwest) の結節点として、東海岸の資本家たちが待望する「中西部のメトロポリス」の誕生を体現していくかたちで急速に成長した過程を考察し、シカゴという都市的空間が、[the East]—[Chicago]—[the rest of the Midwest] という構図として展開することにおいてのみ存立可能な空間であることを明らかにしている。こうしたクロノンの環境史的考察に立脚し、シカゴ大学の学生2人の日常会話において両者のアイデンティティの拠り所として喚起されていた地理的構図が、シカゴ形成の環境史と重なり合うことを示し、後者 (= 環境 (史) = 「彼岸」) が、前者 (= 人間のコミュニケーション = 「今ここ」) に対する歴史的コンテキストを準備していることを明確にする。

【第4章】：現在のアメリカにおける環境 (エコロジー) 思想・環境運動の基盤の構築に大きな影響力をもったジョン・ミューアやアルド・レオポルドによる「自然保護」、「土地倫理」などの思潮が、ソーローやエマソンなどを中心に東海岸 (= 「今ここ」) において形成されていた超越主義思想を、東海岸にとっては絶対的「彼岸」として存在した中西部 (ウィスコンシンなどシカゴの後背地) が、「アイデンティティ」の構築と深く関連しながら中西部の地においてローカル化したことを図式的に示す。それによって、アメリカにおける環境思想・環境運動が、19世紀中葉以降、シカゴの形成過程において構築されていく [the East]—[Chicago]—[the rest of the Midwest] という、シカゴ大学の学生の談話において観察されたものと同一の環境史的コンテキストを基盤に生起、発達した軌跡を追い、アイデンティティという、人間社会におけるきわめて「文化」

的な領野において、コンテキスト化された「環境」が、重要な役割を演じていることを示唆する。

以上の考察を通して、本稿では、〈今ここ〉と〈彼岸〉のコミュニケーション理論の枠組みに立脚し、アメリカにおける文化社会、環境思想・環境運動、そして環境（環境史）の3者の連関を明らかにする。そのことによって、the East—Chicago—the rest of the Midwestとして「コンテキスト（ローカル）化された言説としての環境」が、シカゴを基点とした人間社会におけるコミュニケーションの次元、すなわち「文化」という「環境（自然）」とは単純な指標的関係をもたない（つまり「自然」的な「モノ」へは解消されえない）人間の象徴的相互行為の背景として浮かび上がることを示す。そして、通常、社会文化的コミュニケーションの領域として理解されるわれわれの現実世界（いわゆる人間社会）とは、環境を含みこんだ複合体として成立していることを明確化し、文化と自然の2項対立という還元主義的思考を乗り越えうる「環境コミュニケーション」の視座を提示したいと考える。

2. シカゴ大学生の日常会話 —シルヴァスティンの談話分析事例—

本章では、シカゴ大学の大学院生2人によって行われた日常会話を、シルヴァスティン（2007）の分析に依拠して考察し、ダイクシスの使用を通して、会話が行われている「今ここ」に、the East—Chicago—the rest of the Midwestとして概念化された環境が基盤づけられることによって、談話における発話参加者のアイデンティティ、力関係の構築に、環境がどのように介在しているのかを考察したい。（以下において使用する談話データは、部分的なものである。全データに関しては、シルヴァスティン（2007）を参照されたい。）

73

(1) 「学部」というオノミー的知識

シカゴ大学大学院生 Mr. A と Ms. C の会話は、まずシカゴ大学におけるそれぞれの所属学部をめぐって展開していく。法学部所属の Mr. A は、両者に共有されているシカゴ大学の学部間の価値の序列化された知識（「オノミー的知識³⁾」）を相互行為の場において喚起させ、ダイクシスの使用によって、互いの存在をその序列の中に配置することで、SSA 学部（the School of Social Service Administration）所属の Ms. C に対して「優位」に会話を進行させる（下記、Example 1 参照）。

【Example 1】

Mr. A: first of all but anyway What school are you in are you

Ms. C: I'm at SSA

Mr. A: Oh well! What do they do over there

Ms. C: Well... it's a school in turmoil right at the moment I think

Mr. A: Really? I I have no idea - conception at - at all of what

たとえば、Mr. A は Ms. C に対して、“What do they do **over there**.” という表現で SSA がどのような学部であるかについて質問をしているが、まず、ここで Mr. A は、「over there」というダイクシスを用いて SSA 学部をさし示すことによって、発話が行われている「今ここ（here and now）」から、言及されている場所「彼岸（there and then）」、つまり両者に共有されてい

るシカゴ大学の学部をめぐる象徴的価値の体系へとアクセスする。同時に「over there」は、「今ここ」と、「彼岸」とのあいだに明確な境界線を設け、両方の距離を指標するダイクシスであることから、Mr. A は、それを使用して SSA 学部を言及することで、「今ここ」に（大学組織の中心として）自らが所属する法学部を据えおき、Ms. C が所属する SSA を、文字どおり周辺部「over there」に位置づける（いわば、排除する）ことによって、相互行為における Ms. C との力関係を構築していることが観察される。

(2) 変化する相互行為テキスト

このように会話の始まりにおいて両者は、シカゴ大学における互いの所属学部がもつ象徴的価値の序列化された知識（シカゴ大学の学生にとって前提可能なオノミ的知識）に、ダイクシスを要としてアクセスすることで、両者の関係性を構築した。しかし、その後、Ms. C によって現在の SSA 学部に関する詳細な説明がなされたあと、Ms. C が初めてイニシアティブをとって行った “so tell me, what you’re in what year...”（下記、Example 2 参照）という、法学部における Mr. A の「現状」を問う質問を契機に、それまで学部をめぐる価値体系という象徴的次元において展開されていた相互行為が、より指標的次元、つまり「現在（＝今ここ）」へと接近することとなる。

【Example 2】

Ms. C: Yeah so tell me, what you’re in and what year — I’m

Mr. A: it’s I’m in my second year here and it’s uh real-ly real-ly horrible it’s the worst experience I’ve ever had — I don’t know - oh I just in i — i — It’s it’s just an awful lot of work

その結果 Mr. A は、自らの現状、つまり現在、法学部において自らが経験している苦難を告白することとなり、会話においてそれまで保持していた優位な状況から一転、窮地に立たされてしまう。すなわち、会話がより「今ここ」へと移動したことにより、学部をめぐる象徴的なオノミ的知識へと結びつけられることで成立していた Mr. A と Ms. C の（力）関係、アイデンティティが崩れ始めたといえよう。

(3) The East Coast-Centrism

このように、Ms. C が初めてイニシアティブをとって行った質問を契機に、相互行為の流れに変化が生じ、会話の前半で Mr. A が優位にあった両者の力関係が崩れ始めたのであるが、このような窮地を打開し、崩れかけた力関係を再構築するために、その後 Mr. A は新たなオノミ的知識を喚起させることになる（下記、Example 3 参照）。

【Example 3】

Mr. A: I’m from the East — also — which — I don’t know I I don’t —like this area either here

Ms. C: m mmm

Mr. A: Are you from out here or er

Ms. C: No originally South Dakota but I lived in New York last year where’s where in

Mr. A: I'm -m from a place called New Rochelle where are y- where d you live in The City or what

まず、Mr. Aは“I'm from the East. I don't like this area, either here.”と述べたあと、Ms. Cに対して“Are you from out here.”と質問している。「the East」は、ニューヨーク市を焦点として、米大西洋岸北西部から中部までをさし示すアメリカ的な言い回しであるが（Silverstein, 2007, p. 53）、Mr. Aは、「発話者」を指標するダイクシス「I」を用い、自らをthe East出身者として位置づける。そのうえで、「this (area)」、「here」という場所をあらわすダイクシスの使用を通して、「今ここ」（＝シカゴ、中西部）とthe Eastを対比させ、その対比を利用して「I don't like this area」と、「this area」、「here」の価値づけを図っている。さらにMr. Aは、その後「out here」というダイクシスを使用してシカゴに言及すること、つまり、the Eastを経由してシカゴ（中西部）を見据えることにより、相互行為の「今ここ」をthe Eastへと投射し、会話の前半において「シカゴ」、あるいは「法学部」に基礎づけられていた「今ここ」、そして、それにもとづいて成立していた自らのアイデンティティを、今度は〈the East〉へと移植した、といえよう。

こうしたMr. Aによるアイデンティティの「移植」を指標する一連の発話は、当然、その後のMs. Cの応答を強く規定することになる。Ms. Cは、Mr. Aの質問に答え、South Dakota（＝the rest of the Midwest）が自らの出身地であると述べるのであるが、その直後、即座に“but I lived in New York last year”とつけ加え、さらに“where in the East”とMr. Aのthe Eastにおけるより詳細な出身地を尋ねる必要があったのである。

Mr. Aは、法学部に求めていたアイデンティティが崩れることによって、新たなアイデンティティの原拠を、ニューヨーク市を中心とした東海岸（the East）、つまりシカゴ大学、そしてシカゴを中心とした中西部を相対化することのできるマクロな「環境」をめぐるオノミー的知識に求める。会話の「今ここ」を東海岸へと移行させることで、Mr. Aが新たなオノミー的知識を参照し始めたことを首尾よく察知したMs. Cは、自らの出身地をSouth Dakota（東海岸から見て、シカゴよりもさらに西方）といったんは答えるが、そのあとに“but I lived in New York last year”と自らもthe East出身者であることを強調し、“where in the East”と即座に聞き返すことによって、Mr. Aによってthe Eastへと投射された「今ここ」を基点として、自らのアイデンティティを編成したのである。

つまり、Ms. Cは、シカゴがある中西部を、そしてシカゴよりもさらに「遠く」にある自らの出身地であるSouth Dakota（シカゴの後背地）を、Mr. Aを模倣し、the Eastを「今ここ」として相対化し、自らも「the East出身者」としてアイデンティティを構築することによって、Mr. Aと同等の（あるいは、それに近い）社会文化的価値の序列に自らを据えおこうとした、と解釈できよう。すなわち、この一連のやりとりは、①the Eastを中心（＝「今ここ」）として、②その西方にあるシカゴ（＝「彼岸」）、そして③シカゴよりもさらに西方にあるシカゴの後背地the rest of the Midwestという、地理空間に帰せられた社会文化的価値の序列“the East Coast-centrism”が、その発話に参加している両者に前提可能なオノミー的知識として共有されていることを陰画的に示しており、それが相互行為の進行に深く関与していることが如実に観察できるのである。

このように、シカゴ大学の学生2人による日常会話では、大学内部の学部をめぐる価値体系と同様に、the East—Chicago—the rest of the Midwestという地理空間の構図が、発話参加

者に喚起、参照可能な価値の序列として概念化されていることが理解できる。それを発話参加者は、ダイクシスを媒介として、会話が行われている「今ここ」において喚起させることで両者の関係性を構築し、それによって相互行為の進行を可能にしたのであるが、それは、the East—Chicago—the rest of the Midwest という「知識としての環境」が、シカゴにおける人間の相互行為を支えるコンテキストとして存在していることを示唆しているといえよう。

3. 自然のメトロポリス「シカゴ」という環境史 —クロノンの分析事例—

前章では、シカゴ大学の学生2人による会話において、the East—Chicago—the rest of the Midwest として概念化された環境が前提可能な知識として横たわっており、両者がその序列の中にダイクシスを媒介にして互いを位置づけることによって、おのおののアイデンティティ、それにもとづく力関係を構築した様子を一瞥した。本章では、そうした「今ここ」の相互行為を方向づけた社会文化的価値体系としての「環境」(=「彼岸」)が、環境史的コンテキストとしてどのように形成されてきたのかを、環境歴史学者クロノンによるシカゴ環境史の分析(Cronon, 1991)に依拠して考察し、日常会話の談話分析事例と環境史の接続を試みる。

(1) 水運の要所

クロノン(1991)は、「シカゴ」という「場所」の環境史を理解する試みは、もしも、それをとり巻いている地理空間、たとえば、農村部や他の都市、地域から切り離されて描かれるならば、それはまったく意味のないものになってしまう、と主張する。そのうえで、彼は、都市の市場とそこに資源を供給する「自然」とのあいだのつながりを、流通や商業、商品と資本のフロー、そして都市と農村の相互の文化的な意味づけなど、都市と農村、周辺地域間の多次的な「交通」を描き出すことで明確にしようとしている(中島, 2005, pp. 95-96)。以下では、クロノン(1991)の分析に依拠し、シカゴの環境史が、農村部や他の都市とのいかなる関係性のなかでつくられてきたのかを、ごく簡単に概観したい。

1920年までには、人口270万の大都市に成長したシカゴも、そのわずか百年前の19世紀初頭には、野生のタマネギが生える湿地帯にすぎなかった(中野・宝月, 2003)。ミシガン湖のほとりの湿地帯に位置するシカゴは、水はげが悪く、地盤が脆弱で、そのうえ、西部を流れるミシシッピ川から遠く離れていたこともあり、西部との交通条件には必ずしも恵まれていなかった。また、ミシガン湖の水運は冬期の結氷と嵐により、一年のほとんど半分近くが閉ざされ、周辺地域とシカゴを結ぶ道路は雨期になると、ほとんど泥沼と化してしまう状態であった。そこで、シカゴ一帯の住民は、港や河川を浚渫し運河を開削し、北東部と中西部を結ぶ交通の要衝としてシカゴを発展させていく。

その先駆けとなったのは、1825年のエリー運河の開通である。ニューヨーク州とニュージャージー州の境界に沿って流れるハドソン川と、五大湖のエリー湖を連結するエリー運河の開通によって、シカゴは直接的にニューヨーク州とつながることになる。ニューヨーク州を中心とする東海岸の開拓者たちは、このルートを伝い西へと向かうのであるが、彼らの手によって、シカゴはその後瞬く間に、小麦・トウモロコシ・大豆・の栽培、家畜の飼育を行う世界的な農業地帯へと成長を遂げていく(中野・宝月, 2003)。1848年には、イリノイ・ミシガン運河が完成し、ミシシッピ川を経てメキシコ湾に出ることも可能になる。こうしてシカゴは、中西部で収穫された農作物をニューヨークを中心とする東海岸へ、東海岸から運ばれてくる種々の農作業用の器具

を中西部（シカゴの後背地）へと供給する、東西における水運の結節点として成長を遂げていくのである。

(2) 鉄道網の「ハブ」

19世紀初頭から中葉にかけてシカゴは、東西両地域にとっての水運の要所として位置づけられていくが、水はけの悪い土壌は、シカゴ周辺における農作物、農業用器具の運搬を困難にした。そのような状況下、シカゴは周辺地域を結ぶ鉄道ネットワークのハブとして急成長していく。1848年に、イリノイ州北西部（ウィスコンシンとアイオワ州の境）に位置するガレナとシカゴ間を結ぶ鉄道が敷かれたのを皮切りに、ミシガン湖東岸地域を中心に、つぎつぎにシカゴを結節点として放射状に鉄道が建設されていく。1852年には東海岸とシカゴを結ぶ鉄道が完成したことによって、水運のみではなく、鉄道を仲立ちとした陸上における東海岸と中西部とのゲートウェイとして、シカゴは急速な発展を遂げていった（Cronon, 1991, pp. 67-70）。こうした鉄道網の発達には、水運を使用した場合には、十数日間も要したシカゴとニューヨーク間の穀物、製品の輸送を、5日間程度に短縮し、ウィスコンシン州北部などからシカゴに輸送される材木を、シカゴ周辺のイリノイ、アイオワなどのプレーリー地帯へと供給するに重要な役割を果たすこととなる。

(3) シカゴ発達における東海岸の役割

ここで興味深いことは、こうしたシカゴの水運、鉄道の発達の背景には、ニューヨークを中心とした東海岸における投資家たちがつねに存在していたことである。たとえば、当時のシカゴ一帯の鉄道会社の多くが、ニューヨーク、あるいはボストンなどの投資家たちの資金によって成立しており、その経営は主として彼らが握っていた。また水運に関しても同様であった（Cronon, 1991, pp. 81-93）。さらにクロノン（1991）は、1834年にシカゴで初めて刊行された新聞 *Democrat* の購読者の地域別分布を調査し、シカゴ在住の購読者と、東海岸（とりわけニューヨーク州在住）の購読者の割合がほぼ同じであったことを強調している（Cronon, 1991, p. 61）。これは、シカゴが、ニューヨークを中心とした東海岸の投資家たちが、自らが身を置いている東海岸を「今ここ」として、中西部「彼岸」に、新たなメトロポリスの誕生を切望することによって、いわば投機的につくられた場所（都市的空間）であることを示す一側面であるといえよう。

こうして、19世紀中葉以降シカゴは、水運と鉄道網の発達によって、東海岸と中西部、つまりシカゴとその後背地（ミシガン湖西岸と西部プレーリー）地帯とを結びつける中心都市となったのであるが、クロノンが描くシカゴの環境史が明確に示すことは、シカゴという都市的空間が、ニューヨークを中心とした東海岸（the East）と、シカゴを含む中西部（the Midwest）とをつなぐ要石であること。すなわち「シカゴ」として切り取られる「今ここ」の都市空間は、同時に（the East）、あるいは（the rest of the Midwest）にとっての「彼岸」であることにおいて存立可能な空間であるということである。別言すれば、シカゴは、恵まれた地理的条件が重複する場所（「第一の自然」）に偶然位置することで発展が運命づけられていたという環境決定論ではなく、ある程度はそれを基盤としつつも、まず東海岸においてニューヨーク市がヨーロッパ諸国との窓口として東海岸随一の都市としてすでに成長していたこと、そして、その東海岸に身を置く投資家たちが、東海岸を基点（「今ここ」）に、その「彼岸」として存在した中西部との水運、鉄道網の結節点としてシカゴを整備していった人間社会の歴史のなかで、いわば偶発的、創的に生産された社会文化歴史的空間（「第二の自然」）であることを強調しているといえよう。つまり、シ

カゴ大学の学生による日常会話において、力関係構築の拠り所とされた「the East」—「Chicago」—「the rest of the Midwest」というオノミ的知識 (the East Coast-centrism) は、the East を「今ここ」として、それとは対比的な「彼岸」として概念化された the Midwest、そして、両者の結節点となることで成長を遂げたシカゴという、「第一の自然」にある程度は条件づけられつつもシカゴの発達過程を通して社会歴史的に形作られてきたコンテクストとしての「環境」であったのであり、そのように「コンテクスト化された環境」が、人間社会の相互行為基盤を提供していたと解釈できよう。

4. アメリカ環境運動・思想の形成と The Midwest

本稿ではこれまで、シカゴ大学での学生の日常会話の背景に存在した「the East」—「Chicago」—「the rest of the Midwest」というオノミ的知識が、シカゴの形成過程の背後に浮かび上がる環境史の構図と重なり合うことを示した。本章では、現代のアメリカにおける環境運動・環境思想が、19世紀中葉以降どのように展開したのかを、再び〈今ここ〉と〈彼岸〉の枠組みに依拠し図式的な考察を遂行したい。それによって、〈the East〉とは絶対的な「彼岸」として概念化されていた中西部 (シカゴの後背地) がソローやエマソンなどによって〈the East〉で形成された超越主義思想を、その後「ローカル化」するかたちで進展したこと、つまり、第3章で同定した「the East」—「Chicago」—「the rest of the Midwest」というシカゴ形成過程において背景化していた構図と同様の環境史的コンテクストを基盤に展開したことを明確にする。

78

(1) ヘンリ・デイビッド・ソローと The East

アメリカにおける環境思想の萌芽として代表されるのは、ヘンリ・デイビッド・ソロー (1817-1862) であろう。マサチューセッツ州コンコードに生まれ育ち、ボストンのハーヴァード大学で学んだソローは、自然界は精神的真実と道徳的法則を反映していると考え、より「野生」に近い自然は、文明人が強さと想像力を得るために必要とする豊かな生命力をもつ、という超越主義思想を育んでいく (Nash, 1990)。

『ウォールデン』の中でソローは、貨幣や物の豊かさのために働きつづけて疲れ切った人間についてふれ、彼らの精神を貧困化させ、「きわめて無気力で病的な社会」を産み出した原因は「文明生活」であると批判し、自然との親密な関係、自然が与えてくれる生気が、どのようにして人間を救うのかを説いている。また、『メインの森』では、カタドゥン山での経験を、「広漠たる、巨大な、非人間的な自然」と表現し、「このような広漠かつ荒涼とした非人間的な自然を見たことがないとすれば、純粋な自然を見たことにはならないのである。[中略] ここには人間のための庭園は存在せず、誰も足を踏み入れたことのない地球が存在した」(ソロー, 1992, pp. 64, 69) とし、自然を、人間的なものの外側、超越的な〈外部〉としてとらえていると解釈できる (野田, 2003, p. 27)。

このようなソローの超越主義思想は、19世紀初頭から中葉にかけて、the East (東海岸) において形成されていくが、前述した彼の代表作『ウォールデン』は、1854年に出版されており、それはいくつかの点において示唆的である。第一に、この時期は、ウォールデン湖が存在するコンコードから約数十マイルほどの所にあるボストンが、ニューヨーク市と並ぶ東海岸のメガロポリスとして、めまぐるしく拡大をつづけていた時代に相当し、都市化、産業の大規模な進展、鉄道の敷設などによって〈wilderness〉が、かなりの程度、姿を消してしまっていた時期であった。

じっさいに、ソローがウォールデン湖に移り住む直前に、ボストンとフィッチバーグを結ぶ鉄道が、コンコード地域を横切っている (Worster, 1985)。

第二に、その時期は、1848年の運河の建設、そして1852年の鉄道の完成によって、シカゴを基点に東海岸と中西部が直接的に接合された時期とほぼ重なることである。つまり、ソローの超越主義思想が the East において形成された時期は、前節で考察したとおり、アメリカにおける東海岸と中西部間の交通が劇的に変化した時期に相当し、そのルートを辿って東海岸から中西部へ向かった多くの開拓者たちを通して、(東海岸では消えつつあった) 中西部の「豊富な自然」についての報告が、つぎつぎに東海岸へと届けられた時期であり、東海岸の資本家たちの投資によって、シカゴが東西の結節点として急成長し始めたところである。

つまり、『ウォールデン』が出版されるちょうどそのころ、ソローは東海岸の投資家たちによる思索の集結点として急成長をみせるシカゴを結節点に、東海岸と中西部が主に水運、鉄道を通して直結していく大変動期(いわゆる近代化)のまさに真只中を生きていたのであり、彼の超越主義思想はそれと軌を一にすることによって、そして、当然、「豊富な自然」(=開拓されるべき wilderness)を保持するシカゴを中心に広がっている、遠い「彼岸」である中・西部と対極をなした「今ここ」、すなわち東海岸においてこそ形成可能であった、といえよう。1851年にコンコード文化会館で行った“Walking, or The Wild”と題した講演、そして死の直前、1861年の2カ月にわたるミネソタへの旅などをもとにして作成されたソローのエッセー *Walking* は、当時のそうした背景を如実に反映するものとして読みとれる⁴。

When I go out of the house for a walk, uncertain as yet whither I will bend my steps, and submit myself to my instinct to decide for me, I find.... that I finally and inevitably settle southwest.... My needle is slow to settle.... but it always settles between west and south-southwest. The future lies that way to me, and the earth seems more unexhausted and richer on that side.... It is hard for me to believe that I shall find fair landscapes or sufficient wildness and freedom behind the eastern horizon. I am not excited by the prospect of a walk thither; but I believe that the forest which I see in the western horizon stretches uninterruptedly toward the setting sun, and there are no towns nor cities in it of enough consequence to disturb me.... I must walk toward Oregon, and not toward Europe.... Every sunset which I witness inspires me with the desire to go to a West as distant and as fair as that into which the sun goes down. He appears to migrate westward daily, and tempt us to follow him. He is the Great Western Pioneer whom the nations follow.... The West of which I speak is but another name for the Wild; and what I have been preparing to say is, that in Wildness is the preservation of the World. (Thoreau, 2002[1862], pp. 157-162)

すなわち、東海岸の資本家たちが、東海岸からは遠く離れた中西部の地に、新たなメトロポリスの誕生を切望し、シカゴを形成したのと同様に、ソローやエマソンなどに代表される(鉄道が走り、原生林が姿を消し始めた)東海岸の知識層にとって、西部および中西部(=「都市」として成長を遂げていくシカゴを資源の供給地として支えたシカゴの後背地、そして、その彼方に位置する西部⁵)は、豊富な自然、「野生」(wilderness)を保存する超越的「彼岸」として存在していたのであり、そうした西部・中西部の広大な wilderness は、同時に、「神」がアメリカ

に授けた「処女地」、人間の精神、生命、活力の源として、アメリカのナショナリズムのシンボル、より正確には、東海岸のアイデンティティを構築する「概念化された環境」(＝オノミ的知識)となっていくのである。換言すれば、シカゴが東西の結節点として成長していく過程で構築されていく [the East] — [Chicago] — [the rest of the (Mid)west] という構図において、the East (東海岸) を「今ここ」として形成された超越主義思想は、the rest of the (Mid)west を超越・絶対「彼岸」として概念化すること (つまり、the East Coast-centrism) によって、the East の「アイデンティティ」の抛り所を創出したと解釈できよう。

(2) ジョン・ミュア (1838-1914)

このように、19世紀前半から中葉にかけて、ソローやエマソンなどにより the East で形成されていた超越主義思想は、19世紀中葉以降 [the East] — [Chicago] — [the rest of the (Mid)west] という構図を描きながら急成長していくシカゴとともに、ジョン・ミュアや、アルド・レオポルドらに受け継がれ、シカゴの後背地 (the rest of the (Mid)west) を中心にして、新たに転回していく。

1849年、ジョン・ミュアは家族とともに、スコットランドを離れ、ウィスコンシン州中部のマディソンから100kmほど北上したポーターというフロンティアに移住する。まもなくして彼は、農家を離れ、当時、設立後間もないマディソンのウィスコンシン大学に入学し、その後の生涯を方向づける思想の基盤を構築していく。

ウィスコンシン大学でミュアは、地質学者 Ezra Slocum Carr に師事し、地質学、植物学などへの造詣を深めていく一方、ソロー、エマソン、ワーズワースなどといった超越主義思想に出会い、自然科学と「信仰」とは相反するものではないとする信念を確固としていく (Nash, 1967)。大学を中退したミュアは、その後ヨセミテ渓谷、シエラネバダ山脈を探検し、シエラでの101日間を日記的に記録した *My First Summer in the Sierra* を1911年に出版するが、そこでは、ソローやエマソンなどの超越主義的自然観からの明らかな影響が散見される (Nash, 1967, p. 128)。このように、超越主義に色濃く影響を受けたミュアは、その後、ヨセミテ国立公園の設立への尽力や、シエラ地域における自然の保護を訴え、アメリカの環境保護団体シエラクラブの設立や、政治を巻き込んだヘッチヘッチー渓谷のダム建設に対する大規模な反対運動などを推進していくこととなる。

1901年、水不足に悩むサンフランシスコは、ヨセミテ国立公園内のヘッチヘッチー渓谷にダムを建設する計画を発表する。しかし、ソローやエマソンなどの超越主義思想に親しみ「神と自然との究極的な一致」をめざすミュアは、自然はそれ自体で価値をもち、その利用は教育とレクリエーションに限定し、原生林は手つかずのまま「保存」されるべきであるとして「自然保護」の立場からダム建設に反対する。それは、自然を資源とみなし、人間の共有財産として有効活用すべきであるとする、資源保全の観点からの合理的な開発、自然の「保全」の必要性を訴える、アメリカ合衆国営林局初代局長ギフォード・ピンショー、あるいは、結果的にそれを支持したテオドア・ルーズヴェルト等の功利主義的な「自然保全」理論と対立したのであるが、それが結果として、ミュアの「自然保護」思想を、アメリカ全土に流布させる契機となった (Nash, 1967, pp. 161-181)。

このように、自然保護へと大きく展開していくミュアの思想は、急速に大都市へと変貌していくシカゴとの対比において、木材の供給などでシカゴの形成を担っていく後背地であるウィスコンシンが、ソローやエマソンなどにより東海岸において形成されていた超越主義思想を「ロー

カル化」する過程において醸成されたもの、といえるのではないか。言い換えれば、開拓すべき中西部のメトロポリスとしてシカゴを育んだ the East は、一方で、シカゴ発達の過程を通じて、その後背地として位置づけられていくこととなる (the rest of the (Mid)west) の自然を、絶対的「彼岸 (原初)」として神聖視する超越主義思想を内包していたといえる。そして、19 世紀中葉以降、シカゴ形成とまさに同時進行で、ウィスコンシン (シカゴの後背地) において、the East にあった超越主義思想が、ミューアらによって大きく発達・変容していったことは、そうした東海岸による中西部へ向けられた両義的視線を反映した結果であったと解釈できるのではないだろうか。

(3) アルド・レオポルド (1887-1948)

このようなミューアの「自然保護」思想は、アルド・レオポルドにも継承されていく。アイオワ州のバーリントン (シカゴ、ミシシッピ川以西のアイオワ、ミズーリ州などの南西地域を結ぶ鉄道網の拠点 (Cronon, 1991, p. 68)) で生まれ育ったレオポルドは、ヘッチヘッチーダム建設をめぐるミューアと対立したピンショー家の資産で設立されたイェール大学の森林学校で森林管理に関わる職業の訓練を受ける。その後、アリゾナ州とニューメキシコ州の獲物の管理に関する仕事を終え、1924 年には、後の生涯を過ごし、「土地倫理」の思想を育むことになるウィスコンシン州マディソンに移り、合衆国森林生産実験所の副所長を務めた。1933 年にはウィスコンシン大学に新設された獲物管理講座を引き受け、農業経済学科で教鞭を執る (Worster, 1985)。

ピンショー的森林保全 (管理) の思想に影響を受けていたレオポルドは、当初、自然の経済的生産性を高めるためには、慎重で目的をもった自然の「管理」が必要であるとし、1933 年に出版された『獲物の管理』の中では、鹿や鶉のような好ましい獲物は、野生から収穫できる「穀物」としてみなしている。しかし、職務の一環として「害獣」とされていたオオカミを大量虐殺したこと、また、それによる生態系の崩壊をまのあたりにし、生態系「保護」の重要性に気づき始め、肉食獣や (wilderness) は人間にとって経済的に価値があるという考えを経由しつつも、人間の存在に関係なく自然はそのもので価値を有するという思想へと変容していった。そうした思想は、生態系を重視する彼の「土地倫理」の思想として結実する。「土地倫理」の思想は、人間の利益のみを重視した「自然保全」の限界を指摘し、その土地に生きる人間と動植物の関係全体に「倫理」を適用すべきであること、つまり「共同体」概念を土壌、水、植物、動物など、自然全体に拡張し、自然、そして他の生命体が健全に生きる「権利」を認めようとするものであったといえる⁶。

その意味においてレオポルドの思想は、「自然管理」から「自然保護」というミューア的思想へと接近して行くのであるが、そうした「土地倫理」の信念に突き動かされるように、彼は晩年をウィスコンシンの「自然保護」、自然の生態学的「復元」に費やしていく。彼は、自身が教鞭を執ったウィスコンシン大学のマディソン植物園・野生生物避難所の主たる目的を、「原初のウィスコンシンの見本、われわれの祖先が 1840 年代にここに到着したときにデイン郡がどのような見本 [中略] をつくる」(パルマー, 2004, p. 35) とし、人生の最後の 13 年間の余暇を、ウィスコンシン川の岸辺の土地を生態学的に「復元」することに費やした。つまり、「土地倫理」として結実するレオポルドの思想は、ウィスコンシンの「自然」とともに存在し、ミューアの「自然保護」の思想と融合するかたちで、ウィスコンシン (中西部) の「原初の復元」、換言すれば「原初の創造」へと発展していくのである。

(4) 〈今ここ〉の〈彼岸〉、「国立公園」というアイデンティティ

以上のとおり、現代アメリカの環境（エコロジー）思想の直接的な基盤を構築し、国立公園設立や「保存・復元」、「自然の権利」、ディープ・エコロジーなどの思想の母体となるミュアやレオポルドの「自然保護」、「土地倫理」の思想は、19世紀中葉以降、シカゴ形成過程を通して構築されていく the East—Chicago—the rest of the (Mid)west という地理的概念の構図のなかで、超越主義思想を形成していたソローやエマソンの生きる東海岸が、その絶対的「彼岸」として理念化していた西部・中西部（シカゴ形成の「資源」の源であったウィスコンシンなどの the rest of the (Mid)west）において開花したのである⁷。

このように東海岸にとって絶対的「彼岸」であり、そのアイデンティティ（ナショナリズム）の抛り所として存在した中西部は、しかしながら、ミュアやレオポルドなど中西部を生きる者にとっては紛れもない「今ここ」として存在していたはずである。言い換えれば、ミュア、レオポルドらによって受け継がれ、「自然保護」、「土地倫理」として中西部の地において開花していくソローやエマソンなどによる東海岸の超越主義思想、環境思想とは、ミュアやレオポルドが生きた、まさに〈今ここ〉としての中西部が、東海岸の超越主義思想をローカル化（コンテクスト化）させること、つまり、中西部独自の「アイデンティティ」の抛り所として、中西部（「今ここ」）におけるさらなる「彼岸」をつくり出す装置として現れた思想、であったと解釈できるのではないだろうか。すなわち、シカゴ大学の学生の会話において、両発話参加者がダイクシスを使用して〈今ここ〉と〈彼岸〉（=the East—Chicago—the rest of the Midwest）という環境史的コンテクスト）を連結することによって、彼（女）らのアイデンティティを構築したのと同様に、東海岸の超越主義思想がローカル化される過程で現れたミュアやレオポルドの思想は、the East—Chicago—the rest of the Midwest という同様のコンテクストを前提としつつ、〈今ここ〉としての中西部において、自らのアイデンティティの原拠となる中西部における〈彼岸〉、つまり「今この彼岸（超越）」を紡ぎ出す思想的装置として機能していたといえよう⁸（Kosek, 2004）。そして、そのような思想的装置によって人工的に産出された西部・中西部にとってのアイデンティティの原拠こそが、「現前の形而上学」、すなわち（後に、ユネスコが指定する世界遺産）イエローストーンやヨセミテといった国立公園、あるいは、レオポルドらがとり組んだウィスコンシンにおける「復元された原初」であったのである、と解釈できよう（McCormick, 1989, pp. 31-36）。

5. 結論

本稿では、「環境なきコミュニケーション研究」と「コミュニケーションなき環境研究」という、〈文化と自然〉の2項対立を反映する今日の研究営為に対する問題意識に立脚し、〈今ここ〉〈彼岸〉という詩的構造によって織り上げられる「テキスト」として相互行為をとらえ、そのテキスト化の過程を理論化する言語人類学の分析枠組みに依拠し、談話分析や語用論などを中心に展開する日常会話の分析と、環境（史）、そして環境運動・環境思想の発達過程の接合を試みた。それによって、アメリカにおける環境運動・環境思想が、シカゴ大学生の日常会話において観察されたのと同様に、the East—Chicago—the rest of the Midwest というシカゴの形成過程において構築された「環境史的コンテクスト」を基盤として、〈今ここ〉〈彼岸〉という詩的構造を形成しつつ、「アイデンティティ」の創出と深くリンクしながら展開したことを図式的に示した。

以上の考察から示唆されること、それは「環境」とは、人間社会のコミュニケーションを通し

て、知識、概念、価値といった「意味」、つまり、きわめて「文化」的（イデオロギー的）なものとしてコンテキスト（ローカル）化されており、それが人間社会で行われる相互行為に輪郭を付与する（つまり、テキスト化する）基盤となっていること。言い換えれば、われわれが生きる現実世界とは、相互行為の〈今ここ〉を中心にして広がる、文化と環境（自然）との複合体（nexus）として成立していること、であるといえよう。このように、「環境」が社会文化という特定のコンテキスト（「ローカル」なもの）として生きられ、われわれの現実世界が、文化と環境の両者が不可分に絡み合う複合体として構成されている〈今ここ〉であるとすれば、環境を無視したコミュニケーション研究は端的に言って誤りであり、そのような視座は、〈文化と自然〉の2項対立の再生産に終始する結末を迎るのではないだろうか。また、現在行われている環境運動は、社会文化歴史的コンテキストとして生きられているものとして「環境」概念を再規定することによって、「環境」を主題として展開する今日の環境運動それ自体が、人間社会において行われるコミュニケーションの一樣態にすぎないことを自覚し、「コミュニケーション」概念を基盤に、自己再帰的視座を内包した新たな環境研究の可能性を見出すことができるのではないだろうか。人間と環境との関係性を再構築する可能性とは、そのような地平においてこそ求められるべきであり、それこそが、今後の「環境コミュニケーション」が進むべき路なのではないだろうか。

註

- 1 もちろん、上述した分野のみに現在の環境研究の全体を還元できるわけではない。とりわけ、近年の環境社会学、ポリティカル・エコロジーなどの分野においては、コモンスなどにみられる「ローカル」な共同体的土地利用法、所有権の問題、それに付随して現れる政府と地域住民の対立、政治的権力関係、または、「ローカリティー」、「コミュニティ」概念そのものの構築性に関する批判的研究、環境（保護）思想・政策とコロナリズムとの関連などを問題群とした研究がなされており、当然、本稿はこれらの論考と多分に視座を共有するものである。しかしながら、こうした分野における研究は概して、人間社会と「環境」の交点を、いわゆる下部構造的領域を媒介として主題とする研究が中心であるといえ、象徴、価値、言語、アイデンティティ、イデオロギーなどといった、通常「文化」概念の中核に存在すると考えられる「意味」の問題と「環境」の関連を十分には扱い切れていないという感が残る。
- 2 「わたし、あなた」などの一人称、二人称名詞、「こ・そ・あ・ど」などの指示代名詞や時制などに代表され、発話が行われているコンテキストそのものをさし示す機能をもっている。換言すれば、コンテキスト（彼岸）を、発話が行われている場（今ここ）に基盤づける機能を果たしており、「状況依存性」が相対的に高い言語要素である。たとえば、一人称名詞「わたし」がさし示す対象は、発話状況がわからなければ同定できない反面、「美」、「真理」などの抽象名詞がさし示す対象は、発話状況にかかわらず、同定可能性は顕著には変化しない。
- 3 カテゴリーとして体系化された知識、あるいは範疇的知識など、概念的知識をさす。概念的な知識は、タクソノミー（ツリー上の範疇の体系）、パートノミー（全体・部分という関係にある範疇の体系）、順列型の体系、範列型（マトリックス型）の体系などからなる。
- 4 “It is in vain to dream of a wildness distant from ourselves. There is none such. It is the bog in our brains and bowels, the primitive vigor of Nature in us, that inspires that dream. I shall never find in the wilds of Labrador any greater wildness than in some recess of Concord, i.e. that I import into it.”(Rothwell, 1991, pp. 126-127) というソローによる日記が示すように、彼は、ほとんどコンコードから離れることがなく、旅といってもメイン北部やケープコッド、ニューハンプシャーやケベックなど、アメリカ北東部周辺に限られていた。またソローは、「速く」の「野生」を夢想することを空虚な行為として認識し、コンコードの地において「野生」を見出そうとする一面をもっている。しかし、それをもって、彼が「西部、および中西部」を意識していなかった、とい

う結論にはならない。たとえば、この日記の中でソローが言及しているのは「ラブラドル高原」(北部)であり、いわゆる「西部、および中西部」(マサチューセッツからみて南西)を想起させる場所ではないことに注意されたい。とくに晩年のソローにとって、西部、および中西部と(wilderness)(野生)の概念が結びついていたことは *Walking* が示すとおりであり、いわば抑圧された西部への想いが、ソローの超越主義思想であったといえるかもしれない。

- 5 いうまでもなく、「中西部」は、かつては「西部」として存在していたのであり、その後、いわゆるフロンティアの開拓が進行したことによって、「西部」ではなく「中西部」と(呼ばれるように)なった。つまり、地理的範疇、あるいは「環境」とは、クロノンが述べるとおり、歴史を通じて変容していくものであるといえる。
- 6 レオポルドの死後、1949年に出版された『砂漠の暦』は、土地理論を最初に打ち出したものとして、今日のディープ・エコロジーや、「自然の権利」思想の出発点とされている。(海上, 2005, p. 71)
- 7 じっさいにウィスコンシン大学は、現在、北米における環境研究、環境歴史学研究の拠点として、多数の研究者を輩出している。環境歴史学者ロデリック・F・ナッシュは、1964年にウィスコンシン大学大学院において歴史学の博士号を取得し、同じく環境史家のウィリアム・クロノンは、現在、同大学において教鞭を執っている。
- 8 このような思潮は、その後ジョージ・セッションズ、ビル・ディヴォールなどのディープ・エコロジー、デイヴ・フォアマンの「アース・ファースト!」、あるいは、文明を自然環境に対してより責任あるものにするべきという問題意識から、アメリカ人の思想や政府、ライフスタイルの抜本的転換を主張した詩人ゲーリー・スナイダーなどの思想へと結実していくこととなる(Nash, 1990)。そして、そうした国立公園の設立などによって具現化された「自然保護」の思想が、その陰面としてアメリカ先住民の排除(=社会的コンテクストの抹消)につながったことを、ここで強調しておく。

参考文献

84

- 阿部 治 (2002). 「環境コミュニケーション・環境教育・市民参加：環境意識の啓発」財団法人地球環境戦略機関 (編) 『環境革命の時代：21世紀の環境概論』(193-202頁). 東京書籍.
- Cronon, W. (1991). *Nature's metropolis: Chicago and the Great West*. London: W.W. Norton.
- Hacking, I. (1990). *The taming of chance*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kosek, J. (2004). Purity and pollution: Racial degradation and environmental anxieties. In R. Peet, & M. Watts (Eds.), *Liberation ecologies: Environment, development, social movements* (pp. 125-165). New York: Routledge.
- 小山 互 (2000). 「記号言語理性批判序説：記号論の「可能性=終焉」のかくも長き不在」『現代思想』第28巻, 第8号, 169-191頁.
- McCormick, J. (1991). *Reclaiming paradise: The global environmental movement*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- 中島弘二 (2005). 「『自然』の地理学」水内俊雄 (編) 『シリーズ (人文地理学) 4: 空間の政治地理』(85-108頁). 朝倉書店.
- 中野正大・宝月誠 (編著) (2003). 『シカゴ学派の社会学』世界思想社.
- Nash, R. (1967). *Wilderness and the American mind*. New Haven, CT: Yale University Press.
- ナッシュ, R. (編著) (2004). 『アメリカの環境主義：環境思想の歴史的アンソロジー』(栗栖聡・藤川賢・川島耕司・訳). 同友館. [原著: Nash, R. (1990). *American environmentalism*. New York: McGraw-Hill].
- 野田研一 (2002). 「世界/自然とのコミュニケーションをめぐる」『異文化コミュニケーション論集』第1号, 15-26頁.
- 野田研一 (2003). 『交感と表象：ネイチャーライティングとは何か』松柏社.
- バルマー, J. (2004). 『環境の思想家たち 下：現代編』(須藤自由児・訳). みすず書房. [原著: Palmer, J. (2001). *Fifty key thinkers on the environment*. London: Routledge].
- Rothwell, R. L. (Ed.), (1991). *Henry David Thoreau: An American landscape*. New York: Paragon House.
- Silverstein, M. (2007). How knowledge begets communication begets knowledge. 『異文化コミュニケーション論集』第5号, 31-60頁.
- Thoreau, H. D. (1862). *Walking*. *Atlantic Monthly*, 9(56), 657-74. [Reprinted in L. Hyde (Ed.),

- (2002). *The essays of Henry D. Thoreau* (pp. 147-177). New York: North Point Press].
- ソロー, D. (1992). 『メインの森：真の野生に向かう旅』(小野和人・訳). 金星堂. [原著：Thoreau, D. (1972). *Main woods*. Princeton, NJ: Princeton University Press].
- 海上知明 (2005). 『環境思想：歴史と体系』NTT 出版.
- Worster, D. (1985). *Nature's economy: A history of ecological ideas*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 結城正美 (2004). 「エコクリティシズム：文学と環境のインターフェイス」『異文化コミュニケーション論集』第2号, 55-64頁.